

〔社会学部研究会シンポジウム報告〕

大 学 の 理 念

山 中 良 知

大学の理念という講演をするにあたり一言まえおきを申しのべますと、大学の理念を勉強するうちに、私自身も多少興味がわいてき、現代の大学が歴史の中で理念の混乱を呈しているのだということがわかって来たのであります。では何故にそうなっているかを、今日はこの大学の理念の表を見ていただきながら勉強していきたく思います。

理念には二通りの意味があります。狭い意味の理念と広い意味の理念とがあります。狭い意味の理念というのは理想的な概念としてみられるものなのですが、広い意味になると現実形態のすみずみまで全体を網羅するような意味でそれを理念ととることができます。ですから、狭い意味だけでなく、理念を広い意味にも用いて大学の集団全体の特色を拾いあげてみたいと思います。本を読んでみても事実理念を色々の形で書いてあるので多少広い意味の理念を整理して、この表のように理念化した項目を書いてみたのです。しかし、この項目を一応は整理して、ならべたものの、わからない点があります。例えば、機能と使命とかいうところで、その区別を一々定義しなければなりません。一応常識的に考えて、この表をみて下さい。大学の機能というのは、まちまちであり、はっきりしないところがありますので、その点はまた論議してもらいたく思います。

〔狭い意味の理念〕

これから表によって話をすすめてゆきます。先ず、狭い意味の理念ですが、そのタイプとして、大体、神中心の大学と、人文主義の大学と、社会奉仕の大学と、それから国家中心、これは政治的の大学で、大学論の中でもこのように大体四つによくまとめてあります。そして、第三（教養主義の大学）と第六（マルチバーシティーの大学）とは他の中に包括されるわけでありまして。しかし多少違っているもので、ここでは、全部を六つに分け

た次第です。大学がレジャー・サービス産業となると超マルチバーシティーとなるので、今のところこれはここに入れて考えません。

狭い意味の理念として、神中心の大学は、われわれがよく大学の歴史の一番初めでぶつかる大学であります。この大学は *studium generale* といった形態をもっています。その理念となるのは当然、カソリック教会中心であります。といひましても、プロテスタントの教会とは違うのは当然であり、ローマ法皇を中心とした、あのカソリック教会の理念を中心としています。そこでは、神中心ということがいわれますが、それはいくぶん不正確な言い方で、カソリックののべる神中心の理念といった方がよいでしょう。そして、これは時代としては勿論中世なのであります。この中にもボロニアやパリ大学では大分違った形をもっています。そういう大学が形成される前の修道院の学制は大分違ってはいるわけですが、最も典型的に考えて、カソリック教会中心の大学というものを、ここに一つあげてみたわけですが。それに対して新しく出てきた大学として、人文主義の大学があります。これは、いわば「象牙の塔」という言葉で象徴的に言われており、真理の為の大学であります。これは特に *uni-versus* 「一つに向う」という理念が示しているように、専門に分裂すべきでないということが主張されています。シュライエルマッヘルはユニバーシタスは「全体の理念」をつかまえることによって、学の根本原理を知り、全体を個において、個を全体において把握するといっている。とくにこの大学は、真理が大学という機関の中に自己限定して真理の顕現の場として自覚されています。真理が知的形態をとって、その教師や学生の研究をとおして、具体化される場である。その尊厳な使命のもとにある大学においては、何人も大学の研究の場を侵すことが

大学の理念

	1	2	3	4	5	6
種類	神学中心の大学	人文主義の大学	教養主義の大学	社会奉仕の大学	国家中心(政治的)の大学	マルチバーシティーの大学
理念	<ul style="list-style-type: none"> カトリック教会中心 神中心 	<ul style="list-style-type: none"> 象牙の塔 真理のため uni-versus 	<ul style="list-style-type: none"> 人間性の重視 	<ul style="list-style-type: none"> 社会奉仕のため 社会のニーズにこたえる 	<ul style="list-style-type: none"> 富国強兵 	<ul style="list-style-type: none"> 多元主義 混合
世界観	<ul style="list-style-type: none"> カソリズム 	<ul style="list-style-type: none"> ヒューマニズム 	<ul style="list-style-type: none"> リベラリズム 	<ul style="list-style-type: none"> プラグマチズム 	<ul style="list-style-type: none"> トータリタリヤニズム 	<ul style="list-style-type: none"> プルラリズム
使命	<ul style="list-style-type: none"> 神と教会への奉仕 民族をこえる 	<ul style="list-style-type: none"> 人類に貢献する 文化の創造伝授 	<ul style="list-style-type: none"> 人格の開発、育成 	<ul style="list-style-type: none"> 公共的奉仕 民主的指導者の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 国家に有為な青年の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 研究、教育、奉仕
機能	<ul style="list-style-type: none"> 自己統一的防衛的集団の形成 	<ul style="list-style-type: none"> 教育と研究による知的真理の探究 	<ul style="list-style-type: none"> 教育と研究による人格の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 情報化社会の中での知的中枢 教育は社会過程 	<ul style="list-style-type: none"> 国家を強める 	<ul style="list-style-type: none"> 研究と技術をたかめる
カリキュラムの特色	<ul style="list-style-type: none"> 神学中心 七科目制 伝統的知識 	<ul style="list-style-type: none"> 哲学中心 科目の有機的統一の重視 	<ul style="list-style-type: none"> 一般教養の重視 古典重視 	<ul style="list-style-type: none"> 一般教養専門職業科目の重視 集中主義と分散主義 	<ul style="list-style-type: none"> 法学、理工学部の重視 	<ul style="list-style-type: none"> 多元的、実用的科目をおく
教育と研究		<ul style="list-style-type: none"> 研究重視 	<ul style="list-style-type: none"> 教育重視 	<ul style="list-style-type: none"> 教育重視 		
大学院		<ul style="list-style-type: none"> 重視 		<ul style="list-style-type: none"> 研究低下を補う 		<ul style="list-style-type: none"> 職業教育のため
教育の理想像	<ul style="list-style-type: none"> 教会人 	<ul style="list-style-type: none"> 学者 	<ul style="list-style-type: none"> ジェントルマン 統治エリート 	<ul style="list-style-type: none"> よき市民 職業人 	<ul style="list-style-type: none"> 官吏 	<ul style="list-style-type: none"> 職業人 民主的指導者
制度		<ul style="list-style-type: none"> 講座制 	<ul style="list-style-type: none"> 学寮制 		<ul style="list-style-type: none"> 専門学校 	<ul style="list-style-type: none"> よりあい所帯
主体	<ul style="list-style-type: none"> 教会・教皇 	<ul style="list-style-type: none"> 大学 		<ul style="list-style-type: none"> 社会 	<ul style="list-style-type: none"> 国家 	<ul style="list-style-type: none"> 大衆
歴史	<ul style="list-style-type: none"> 中世 	<ul style="list-style-type: none"> 17世紀以降 	<ul style="list-style-type: none"> 中世 	<ul style="list-style-type: none"> 現代 	<ul style="list-style-type: none"> 現代 	<ul style="list-style-type: none"> 最近
集団の構成	<ul style="list-style-type: none"> 信仰の共同体 	<ul style="list-style-type: none"> 真理探究の共同体 	<ul style="list-style-type: none"> 人格育成の共同体 	<ul style="list-style-type: none"> 利益共同体 		<ul style="list-style-type: none"> 利益共同体
大学の自由	<ul style="list-style-type: none"> 国家から自由 教会から不自由 	<ul style="list-style-type: none"> 法から自由 学問の自由 		<ul style="list-style-type: none"> 社会のニーズに依存する 	<ul style="list-style-type: none"> 自由に制限がある(ソ連など) 	
実例	<ul style="list-style-type: none"> パリ大学 	<ul style="list-style-type: none"> ベルリン大学 	<ul style="list-style-type: none"> オックスフォード ケンブリッジ 	<ul style="list-style-type: none"> アメリカのリベラルアートカレッジ 	<ul style="list-style-type: none"> 日本の帝国大学 	
提唱者		<ul style="list-style-type: none"> カント フィヒテ フンボルト 		<ul style="list-style-type: none"> コナント 		<ul style="list-style-type: none"> ジョン・ホプキンス クラーク・カー
相互関係	<ul style="list-style-type: none"> 第2との関係 	<ul style="list-style-type: none"> 第5との関係 	<ul style="list-style-type: none"> 第1, 第2, 第3はグループとなる 	<ul style="list-style-type: none"> 第5と似ているが理念の相違 		<ul style="list-style-type: none"> 第4, 第5, 第6はグループとなる
問題点		<ul style="list-style-type: none"> 閉塞的 		<ul style="list-style-type: none"> 開かれている 		<ul style="list-style-type: none"> 弛緩している

できないのだというところがあって、いわば大学らしい大学ということができません。これは、表の後のところで、「大学の主体」のところを見ていただきますと人文主義の大学は、その主体が大学自体であるということです。例えば、中世の大学が主体が教会や教皇であるとすれば、人文主義の大学は大学らしい大学で、主体は自己自身であり、その中に真理が自己限定する場を提供している。世の中のあらゆる集団よりも、大学は真理に直結する、最も尊いところである。法よりも高い次元に大学をおくのは、この場合の大学のレベルが、高いものであるからでしょう。その点で第四の社会奉仕のための大学とは大分違うわけですが、第二と関連しながら、しかも多少変わっているところに第三の教養主義の大学があります。これは、オックスフォードやケンブリッジなどが行なっているようなタイプのものなのです。人間性の重視をかかげて、非常に古典重視とか教育重視とかいう形をとっていて、第二の大学が研究を重視するものとは多少異なっています。第四は社会奉仕の為の大学なのですが、これは社会のニードに答えるための機関であるといえます。第二の人文主義の大学と全然違い結局 social service station として社会化の一つの円環運動の中に大学というものの機能を規定しています。社会は自分達が創った文化の集積を持っているが、大学はその集積を若い人達に伝える一つの任務をもっている。その社会に必要な文化を修得することによって社会に適応していく人間を作り出す円環運動の中で、大学というものが知的再生産の場所として位置づけられる。これは、情報化時代における社会奉仕の大学の理念です。要するに社会の生産性のためにおかれている。それで大学教育とは社会過程であり、国民のもっている社会的ビヘイビアと深い関係にあります。第五は国家中心或いは政治的の大学といわれているものです。これは富国強兵という理念をもち、学生を教育して、やがて官吏になり国家の有為な人物になるための機関として大学を考えています。或るところで、政治的の大学と書いてありますが、ソ連や、日本の帝国大学や、或るいはフランスにおいてナポレオンの政治下のあった大学等は全部そのような国家中心のなところをもっています。

第六はマルチバーシティーの大学という一特に第二次世界大戦後こういう言葉が用いられたそうでありまして一今までの五つのあらゆる要素を混合したような多元主義—この多元主義といいますが、第四の社会奉仕の大学に近いわけなのであり、その中に第二の象牙の塔的な要素が大学院という形で入っていますが、しかし理念の混合形態をいっています。しかしこの混合が良い意味での混合であるという主張と、大学の墮落であるという主張があります。university という統一性が弛緩したものであるという悪い意味でのマルチバーシティーという言葉と色々使われているのです。「新しいものを創造する機会への適応性、資金への反応性、新しい意義ある役割をなす熱意、短期間に伝統をすてる力」ということが、説明されている本をよみました。しかし、悪い点は「マンモス化、実用的知識のみをとっている。専門家はいるが、専門外については教養がない。道徳的権威なく、連帯性がない。近代的管理技術を入れて機能を果すために利益社会的である」とのべられています。つまり、研究、教育、管理の分離をもたらしています。しかしともかく、そういう形で混合されています。

〔世界観〕

その世界観は、当然第一はカソリシズムであります。これは一つの中心的世界観を述べたわけで、中世の大学が全てカソリシズムによっているとはいえません。イタリアのボロニアやパドアの大学とパリ大学の中のソルボンヌ大学の理念とは多少違いますが、典型的な世界観としては、カソリシズムであります。

第二の人文主義の大学の世界観はやはりヒューマニズムで、第三の教養主義の大学では、英国のオックスフォードやケンブリッジ大学などですから、リベラリズム。第四はなんといっても社会奉仕の為ですから社会のニードに答えていくという形でプラグマティズム。それから第五は国家中心ですから、これは全体主義でトータリタリアニズムであります。全体主義といいますが、日本の明治期をすぐ全体主義といえるかどうかは問題としても、ソ連などでは特に国家の為の大学というものを強調しますから、当然理念的にいうとやはり全体主義と言えます。それから第六のマルチ

バーシティーの大学はpluralismです。pluralismという世界観は無いかもしれませんが。pluralismというのは方法論的な言葉なのであって、同じレベルの中には入れられませんけれど、ともかく上のようなものを全部混合したようなものです。

〔使命〕

ではつぎに、使命はどうかといえますと、当然第一の神学中心の大学の使命は神と教会への奉仕です。この教会とは言うまでもなくローマカソリックの教会です。ここの大学の良い点は民族や国境を越えているという点です。民族を越えた、普遍的なものをもっている。その点は第五の国家中心と対立関係にあって *studium generale* という身分も大学の中に集まって来た者はギルド制を作り、そこで普遍的な真理を平等に追求する権利をもっている。第二の人文主義の使命は、人類に貢献する文化創造の伝授です。これは、真理がその大学を通して自己顕現するということですから、なんといっても文化の創造が大切であったり、或るいは、その真理を言い伝えるという使命をもっていたりするわけです。これが、たまたま初期ベルリン大学におけるフィヒテなどになると国家を越え、民族を越えているという面よりも、第五の国家中心主義がちょっと顔を出しています。また逆に日本の帝国大学でも第二の要素を、すなわち象牙の塔的なものをもっていて、案外第二と第五とが連関するところがあるようです。

しかし、第二の使命としては、文化の創造と伝授ということ。ヤスパースやフンボルト、フィヒテ、こういう人達がよく言っています。ドイツの国家は世界史の中に何を残したのかということ、高度の大学の制度を残したのであると。大学という素晴らしい文化創造の場を残したのである。これがドイツ文化の各国に対する一つの特色ではなかったか、ということを行っています。この点非常にドイツ的な臭いが強いわけです。

第三の使命は人格の開発で、表のうしろの教育の理想像の箇所でも書いていますが、ジェントルマンシップや統治エリートを育成するのですが、結局、色々高度な教養を身につけて貴族主義といえますか、エリート育成という使命がみられます。

第四の社会奉仕の大学の使命というのは公共的奉仕—これは当然でありますが一民主的指導者の育成を目標としている。

第五のものなかには当然、国家の有為な青年の育成というのがあるわけです。これは、かつての日本がやっていたようなものです。

第六は、やはり、研究、教育、奉仕と色々なものをここにもってきます。しかし、割合に、奉仕の面が強いので、技術教育を重んじ、その使命においても社会奉仕の面があります。しかし、第四のものとは多少異なっています。しかしここでは大学が知識産業の場として知識をなんらかの代替的用途に利用される要素にまで育成してゆく使命をもっています。

〔機能〕

それから次に機能の面です。大学の機能を一体どのようにとらえたらよいのかということが、問題となりますが、第一の大学では、自己統一的防衛的機能をもっていると思います。カソリシズムの世界観の上に立っている大学ですから、ギルド制をそこにもって形成されている大学であり、そこには当然統一的自己防衛的な集団の形成というものを、その大学の中で機能としてもっています。第二は、教育と研究による知的真理の探求という機能を果そうとします。

第三も、やはり、教育と研究における機能ですが、これは大学という場が教育と研究の場所であるからです。ただ第二のように教育と研究が非常に重要視されている大学と、第四の社会奉仕の大学などは教育と研究といっても結局社会奉仕が最後の目的であるから、同じ教育と研究でも大変違ってきます。第四は教育と研究がやがて社会奉仕に連関するし、第二は教育と研究そのものの中に真の目的であるということ。ところが、第四は、それらのことも全て社会の為になるという一つのプラグマティズムの中に狭く位置づけられています。第四の方は特に情報化社会の中の知的中枢という機能を果しています。社会が絶えず自己発展していく中に、あらゆる要素を媒介としながら進歩するときに、大切な知的教育が、その社会の過程の中にある機能を果していくわけです。そういう場としての大学、そういう情報化社会の知的中枢としての機能を考えている訳です。キール

大学の理念も公共的奉仕であります、とくに a sociologically minded Personの教育理念をかかげています。

第五の機能は当然国家を強める機能を果しません。

第六は、やはり、研究と技術を高めるために大学がその機能を果す。特に技術がそこでは強調されています。オルテガは機能的に考えられる大学の理念として「その時代の頂点において生きる」ことを目標としています、これも社会形成を平面においてもっている大学の理念であるといえます。社会の指導権をもつ大学といえるでしょう。

〔カリキュラムの特色〕

つぎにカリキュラムの特色なのですが、第一は神学中心の大学は、神学を中心にして、特に建物などでも神学部が中心になってその他の学部はそれをとりまいて分れているといった形態もっています。歴史的にはその前の段階として、中世の大学は七自由科（リベラル・アーツ）に立っていました。単純な科目を教えているわけなのですが、それは文法、修辞、論理の三学と算術、幾何、天文、音楽の四科からなっていました。七科目は基礎的なものを教えながらそれを、何回も反復し徹底的に修得させることによって、次のアドヴァンスト・コースに行かせる方法をとっていたようです。これは中世の教育において非常に効果があったカリキュラムの制度であります。エティエンヌ・ジルソンという有名な中世哲学者が、中世の大学にこの七科目制があったために非常に良かったのだ、今頃の大学は色々学んでいるけれども、真の知識を生みださないと哲学史の中で云っています。創造的な知識をつくる一つの教育課程としての七科目制を強調しています。七科目制は大学制度が成立するまえの修道院などでの教育として行われていたようです。

第二の人文主義の大学では哲学が中心になります。ここでの特色は科目の有機的統一が強調されており、あらゆる科目が哲学という統一的学問を中心にアレンジされています。そして専門科目に分裂することを排しています。第三の教養主義の大学では、一般教育の重視は当然です。またそこから古典の重視がみられます。一般教育は非常に高度なものです。第四の社会奉仕の大学の一般教

育重視とは少し意味が違います。社会奉仕の大学の一般教養の重視は専門職業科目をやって、その偏重を是正する為にとというような、ある消極的な意味で強調される。教養主義の大学は有用性の理念はみられません、高貴性の理念が強調され、ギリシャ語、ラテン語が重要視されます。

第五は、当然、法学や理工学部の重視であります。日本の大学において文部省などが、理工学部に多くの助成金を出すことなどにもみられますが、法学部とか理工学部を重視するところに、カリキュラムの特色がみられます。

しかし、第六のマルチバーシティーの大学では非常に多元的で、しかも実用的な科目を置きます。例えば、学問になっていない科目でも、どんどん置いていって、学生の要求、また社会の必要度に応じて、何でも科目を置いていくようなやり方で、それはわれわれの学部でもよくやっているところですね。学問ともいわれない科目を提供するというようなところに、マルチバーシティーの大学があります。これには学問が変り、専門化され、学問の中心がかわってきたところに原因があります。その原因としてはさらに、社会が変ってきたことでもあります。

〔教育と研究〕

それから教育と研究という面では、第二は、研究の重視、第三、第四は教育主義的な大学でありますから、教育の重視がみられます。当然、大学院は第二では重視されますが、第四も非常に重視されます。それは逆に研究低下がおこるので、大学院が逆の点から重視されます。今アメリカの大学院が、世界中で最も程度が高いといわれるのはそういうところから来るのです。

第六のマルチバーシティーの大学は、職業教育の為に大学院を重視します。つまり、個人に必要な技能を習得せしめる職業訓練という意味での大学院ですから、第二のものとは理念がちがいます。一般に大学は、文明の社会的、歴史的集積の場であるので、それを貯蔵するばかりでなく、研究を通して拡大し、教育を通して伝達してゆくために、大学院を重視しています。

〔教育の理想像〕

つぎに教育の理想像はどうかといいますが、第一は教会人。第二は学者であります。大学は理想

像として、その養成を目的としています。これは旧制大学ではいつでもこういう形で理想像があったわけです。第三はジェントルマンシップとか統治エリート。第四は、良き市民、職業人。第五は官吏—これはもう当然であります。第六は職業人、或いは民主的指導者が教育の理想像になっています。

〔制度〕

それから制度になりますと、はっきりしたところでは、第二の大学にみられる講座制であります。制度上からいいますとカリキュラムの問題といってもよいでしょうか、講座制を特色としています。第三は例のチューターの制度、即ち学寮制です。第五は大学の問題とちょっと離れるのですが、高等工業、高等商業といった専門学校を重視し、役に立つという点を重視しています。第六は制度としては、学部、大学院、文学、人文、社会、社会・自然科学研究所、管理局というような寄り合い所帯によってなり立っています。ここは、なんといっても大衆のサービス・ステーションですから、そういうものが制度的には当然作られていくわけです。

〔主体の問題〕

大学が本当に支えられている主体は何かというと、第一は当然教会であるし、教皇であります。第二は大学を支えている原理は自己自身の中にあるという点において本当に純粋な面があります。つまり大学の主体は大学が真理探求をしている限りの自己であるといつてもよいでしょう。第四は社会が主体。第五は国家が主体である。第六は大衆が主体であり、教育の対象も平均人であり（これはもう少し後に述べますが、オルテガなどが主張しています）主体がないのが大衆であるので、主体を大衆にするのはおかしいのですが、分類上このように書いてみました。

〔歴史〕

それからつぎに歴史の点はどうかと言いますと、大学が生れ、栄えた時代としては、第一は中世、第二は十七世紀以降、第三はオックスフォード、ケンブリッジになりますと中世と言ってもいいわけです。第四は現代。第五はナポレオンの時代とか現代のソ連とか、あるいは日本の帝国大学時代とかで、やはり現代です。第六のマルティバ

ーシティーの大学は、第二次世界大戦後に主としてこの表現が強調されたものとみることができません。

〔集団の構成〕

つぎは集団の構成ですが、これはひょっとして余田先生が問題とされ、より詳しく問題にされる場所じゃないかと思えます。

第一は信仰の共同体。第二は真理の探求の共同体。第三は人格育成の共同体。それから第四また第六においては、集団の構成の形態は利益共同体的といえます。ここで第一から第三にかけてみられる集団の構成と第四から第六にかけてみられるそれとは、大別して二分され、明瞭な構成上の相違がみられます。前者はゲマインシャフト的、後者はゲゼルシャフト的といつてもよいでしょう。

〔大学の自由〕

大学の自由という問題になってきますと、第一は国家からの自由は主張しますが、教会からの自由がありません。自己閉鎖的、防衛的な性格が国家からは自由であるという性格をもっています。第二は国家勢力からの自由ということから、「学問の自由」という概念を歴史の中でのこしたのと考えられます。akademische Freiheit という非常に高度な地点を強調します。

第四は社会のニードによりますから、社会に依存しています。大学そのものが直接的に自由とはいえません。第五は国家中心的（政治的）大学ですから、ここでは大学の自由はもっとも制限されるものがあります。しかし、まったく自由がないかというところでもないのです。日本の大学でも、この「学問の自由」の問題はある限界内で闘われてきた理念です。それぞれの範囲内で闘っている自由があったわけです。

〔実例〕

第一は特に典型的なのはパリ大学。第二はベルリン大学。第三はオックスフォード、ケンブリッジ。第四はアメリカのリベラルアート・カレッジ。第五は日本の帝国大学あるいはソ連のモスクワ大学などを入れてもいいのではないかと思います。第六は現代の大学が殆んどマルティバシティーの形態をとります。

〔提唱者〕

以上のような理念を特に提唱した人達はど

う人達かといいますが、第二はカントやフィヒテやフンボルト、あるいはヤスパースを入れてもよい。これらの人達、とくにカントは「諸学部争い」というような論文があり、非常に学問の自由を主張したりしています。フィヒテは例の「ドイツ国民に告ぐ」というものがあり、フンボルトはベルリン大学の理念をたて、人文主義の大学を主張した人です。この理念の現代版は、スペインの哲学者オルテガが「大学の使命」の中で記している。

第三は特に誰れという人はありません。第四はコナントというハーバード大学の総長とか、あるいは第六のマルチバーシティーの大学というのはジョン・ホプキンスとかクラーク・カーという人達を挙げることができるでしょう。

〔相互関係〕

最後に、各理念の相互関係はどうかということです。第一は、第二との関係が深いのは当然であります。第二は、第五との関係が出てきます。これは矛盾したことのようですが全く反対の大学が関係することがあるわけです。しかし、第五と関係があるといつてよいのかどうか。例えば、ナチスが、第二の象牙の塔的なものを破ろうとして非常に苦労しましたから、第五との関係があるとはいえませんが、しかし、フィヒテの「ドイツ国民に告ぐ」というのが非常にドイツ主義の上に大学を考えましたから、それを考えて、第五との関係をのべたわけなのです。ここで、第一、二、三というのは、理念としての共通性があり、第四、五、六というのが共通性があるのではないかと思います。そして、大きくは第一、二、三がグループにされ、第四、五、六がグループにされますけれど、ここから現代の大学の理念の対立、また折衷があるのではないかと思います。

〔問題点〕

問題点としては、第二のタイプは、非常に大学らしい大学の理念をもっておきながら、ある意味で閉鎖的であるという点をもっています。第四は非常に庶民的な大学なのですが、しかし開かれていますものをもっています。第六は理念が折衷していますので、弛緩されているという悪い点をもっています。そこから、マルチバーシティーの大学の学長や或いは総長というのは、むしろ調停者に

すぎないということです。ともかく、今のマルチバーシティーの大学の長たるものは、リーダーシップをもってどンドンやるというタイプの人間よりも、調停者の性格をもっている人達が調子がいいのじゃないかと思います。調停者でないような者は、自らやめていかなければならないというような、マルチバーシティーの大学の限界というものがみられます。第二のフンボルトの言ったような人文主義の大学が何故すたれていったかという、これは、デモクラシーのために階級的な社会組織の崩壊して行ったことと、中産階級の増大と、工業化の進展にもとづく実用主義の重視。こういうものが、フンボルト的理念をだんだんすたらせ、凋落させていった原因です。あるいは、近代科学の完成に伴う思考の革命という学問の形態が変ってきたという点。昔ながらの哲学のやり方ではどうにもならないというところがみられてきました。とにかく、学問自身あるいは知識の思考自身が変わってきたという思考革命というようなものによって、第二の人文主義の大学がすたれてきた理由があると思います。よしあしは別としまして、それから、マルチバーシティーの大学になってくる原因としては、知識活動の複合性が主張されて、現代では決して一つの理念ではやっていけないという点も考えられます。社会自身の多元性というものが出ている。その点われわれこのように大学の理念を勉強してみまして、逆にその環境である現代社会は非常に大きな問題をかかえているということが分ります。とにかく、マルチバーシティーでは、大学の一つの設立になっていない。これは、妥協案が出ているにすぎない。第一、二、三、四、五というそれぞれの理念をもっている大学を現代止揚していく為には、自ら大きな克服の理念をもたねばなりません。若しそうでない場合は、名実ともにマルチバーシティーでおさまってしまうのではないのでしょうか。多くの大学の改革案の中でも、色々な理念を色々に入れかえていますが、結局はマルチバーシティー的なものが残っているのが現状です。理念的にも現象形態としても、そうならざるをえないわけです。その点で、われわれは大学の改革という形で色々大きな声を出して云っているとしても、いくつかの理念を統一して、しかも単なる折衷ではな

く高い次元に立った大学改革ではじめて改革であるということを考えると、そうでない改革は、すべて手先の技巧にすぎない、改革より移行にすぎないというデッドロックにつきあたっていることを自覚するわけです。現代のわれわれは、余り能力もないのに、背負わされている荷物は大変重いものであるという感じがします。かつての大学はカントが出、フンボルトが出、フィヒテが出、そして、色々素晴らしい理念の中で開花して行ったのです。ここには、プロテスタントの大学を私は載せていませんが、オランダのライデン大学などは典型的なプロテスタントの大学で、カルヴィン派の大学として出発したのですが、素晴らしい理念でもってスタートをしたわけです。現代は、われわれがこの時点にあたって、こういう過去のもの

のを止揚した形でどのくらいのものを出せるかというと、われわれは謙虚に自分の力の限界を認めざるを得ない。といて、マルチバシティにおさまるといっても、単なる妥協案にすぎないのではないかと思います。

このたびの代行提案のなかで示される大学の理念が、以上の六つの理念をこえた高い次元のものか、また、人文主義の大学とキリスト主義とを結合した位のものか、或いは少しずつよいところをとり入れた折衷的なものか、という問題が出て来ます。これらのことは、これからの関西学院大学が、キリスト教主義をどのように受けとめてゆくに、行く末の運命の道が大きく分かれてきます。以上が、私が調べてきてお伝えしたかったことです。